

ヨブ記に見る信仰者の苦難 1

信仰者は苦難・試練の中でいかに歩むか

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



兄弟姉妹（*クリスチャン同士の呼び方）、こんにちは。

私は飛沫を飛ばすことで有名ですので、今日はアクリルケースの中に入り。

ここから皆さんを見ると、仏壇の中から話しているような錯覚にもなるのですが。

今日のテーマは大変重いんです。

「ヨブ記に見る信仰者の苦難—信仰者は苦難・試練の中でいかに歩むか—」

イエス・キリストを信じたら、良いことばかりが続き、楽な人生が次々訪れ、何をやっても成功し、右肩上がりで繁栄する・・・聖書はそんなこと約束してません。

もし、そんなことを約束する教会のメッセンジャーがいたら食わせ者です。

キリストはそんなことを約束していないからです。とはいえ、この問題は、どうしても避けて通るわけにはいかないんですね。

松伏（まつぶし）集会（*埼玉県）に来る直前、私に1本のメールが届きました。

40代の男性で沖縄在住。いつも私のYouTubeをご覧になっている方。

1回も会ったことはないけど、私を兄貴と慕ってくださる。

「ほんとの兄さんみたいです」と、事あるごとに色んなことを言ってくれるのですが、今回は、今まで言わなかったことが書いてありました。

「初めて言うのですが、実は2年前に娘を亡くしました。そして去年、大好きだった妹をコロナで死なせました。それから間もなく、酔っ払い運転の車に正面衝突され、妻と2人の子供が全員即死しました。私は今 天涯孤独で、家族は1人もいません。

高原さんも奥さんを突然亡くした経験があると伺っていますが、どうやって立ち直ったんですか。

私はクリスチャンだけど、天国で再会できることも信じているけど、悲しみから立ち上がることができないんです。いつそのこと消えてしまいたい。なぜ自分だけが生き残ったのか、罪悪感まで感じます。高原さんは、どうやって立ち直ったのですか。」

ところで、私がすごく尊敬しているクリスチャンの小児科の先生がいます。アメリカ人のジェームス・ドブソン（1936-）博士。コロラド州にあるフォーカス・オン・ザ・ファミリーの創立者です。

「国家の再生は家族から。家族を大事にしよう。仕事に追いまわられて、“この会社は自分がいなくなったら倒れる”とどんなに思っているけど、実際に辞めてごらんください。それなりにちゃんと適正化されて続くから。あなたの代わりは会社にはいくらでもいる。でも家族には、あなたの代わりはいないんだよ。」

聖書の価値観に基づいて、家族の再生について語り続けているクリスチャン・ドクターです。

彼には4人の親友がいて、年に数回 全員集合して祈り合い、聖書の御言葉を分かち合い、共に励まし合っていました。4人は才能は違うけど、顔を合わせると互いに励ましを与え、それぞれに教えられていることが、ドブソン博士に大きな閃きを与えるのです。

- ◆1人は実業家。非常に仕事が出来、ドブソン博士が設立したフォーカス・オン・ザ・ファミリーの理事で博士の片腕。
- ◆ジョージ・クラーク氏。銀行頭取。経済について天才的判断が次々出来る。
- ◆トレバー・メイブリー氏。全米屈指の外科医。アメリカでは医療保険に入っていないとトンデモナイお金が請求されますが、彼は貧しくて手術を受けることができない人たちに心から同情し、同情だけでなく具体的援助をする。患者の約半分の医療費はゼロ。ただで手術する。
- ◆クリス・デービス氏。多くの人々から愛される牧師。クリスチャンの信仰を励ます本を数多く書いている作者。

1987年のその日も素晴らしい時間を過ごし、次の日、4人が乗った飛行機がワイオミングのアブサルカ山脈の上空で原因不明で墜落。全員死亡。1人も助からなかった。

4人の家族の中には成長期の子供たちがいました。お父さんからの善き影響を一番必要としている子供たちがいる。ところが、父親が一瞬にして命取られてしまった。残された家族はどんなに苦しいことでしょうか。今まで“いるのが当たり前”の人が突然取られた時、空虚感・喪失感はどんなものでも埋めることができない。

そして今日、この会場に着いたら、石巻から来られた方からこの数年の間にあつた体験を伺い、もう衝撃の内容で、私は掛ける言葉がありません。何と申し上げたらよいのか…。

なぜなのか。なぜ人生において苦難が起こるのか。悪人に苦難が降りかかるのはまだ分かりますよ。善い人に悪いことがなぜ起こるのか。多くの人はこのことについて悩み、考えるんじゃないですか。

仏教の思想の中には因果応報というのがありますね。カルマという思想です。仏教は無神論で神を認めません。仏教は信仰ではなく、本来の仏教・ヒンズー教は哲学です。“このように考えることによって気持ちを楽にすることができる”という、苦難を乗り越えるためのテクニックですね。

では、カルマはどんな考えか。前世を想定するんです。例えば、“この世で私は3人の子供を失ってしまった。それは、私が前世で他の人の子供を3人殺したからだ”と考えるのです。前の世界でやらかしたことの帳尻合わせを現世でやっているんだ。前世で犯した罪の償いを現世でやっているのだ。だからもう、つべこべ言わずに納得しなさいよ。

しかし、聖書は前世という考え方を否定しています。人は一人ひとり神に造られたもので、別の人格に生まれ変わったりしません。神はあなたを神のかたちに似せて造りました。歴史上 今まで 700 億人の人間が生まれて来たと言われていますが、あなたという人間は、後にも先にもあなただけです。これから後 何百年と世界が続いても、あなたと同じ人は生まれて来ないし、過去 6 千年の歴史を振り返っても、あなたと同じ人はいませんでした。神は唯一です。神が唯一であるように、あなたという人格は唯一です。

なぜ苦難があるのか。これをとことんまで突き詰めて考えて行くと、人は不信仰になるんです。色んな哲学書を見てても、この苦難の問題を通して、結局神が分からなくなったというのが多い。

聖書は「神は全知全能」「神は愛」と語ります。しかし、世の中では実際 酷い事が起こっている。

「神は全知全能なのに、なぜこの悪を止めないのか。」可能性は3つあると言うんですね。

- ①神は人間のことを何も考えていない。愛じゃない。
- ②神は全知全能ではなかった。
- ③元々 神なんかいない。

「世の中でまかり通っている・のさばっている・横行している不条理を見ると、神の全知全能性との整合性がない。だから、神なんか分からない！」

元々 神様を信じていない人にとってはそれも1つの論理かもしれませんが、問題はクリスチャンですよ。

兄弟姉妹、クリスチャンにとって一番苦しいことは何ですか。

私は、苦難を受けることよりも、神が分からなくなること・神が見えなくなることだと思います。もちろん肉眼で見たことはありませんよ。

でも、今まで信じて来た信仰が通用しなくなって、神がどんな方なのか、神のことが分からなくなる。信仰者にとって、これ以上の恐ろしいことはないのです。

しかし、神の存在を少しも疑わず、しかも なぜ苦難があるのかということ、私たちに代わって問い続けた人物が旧約聖書に登場するんですね。ヨブです。

“ヨブ”の意味は解釈が幾通りもあり、確かなことは分かっていません。だからここでも、断定しないでヨブとだけ言います。

今日と明日の2回、**信仰者は苦難・試練の中でいかに歩むか**について、「なぜ苦難があるのか」という質問に答えるのではなく、現に起こっている苦難に対してどう応えていくべきか、どう生きるべきかについて一緒に考えたいと思います。

ヨブ記には、ヨブを取り巻く7人/7つの登場者が出て来ます。

妻・3人の友人・隠れていた4人目の友人エリフ・神・サタン。

サタンはヨブと直接対話しませんが、ヨブが見聞きする出来事や、ヨブをやり込めようとする友人たちの言葉の背後にサタンの意図が現れています。

ヨブ記 1章

1 ウツの地に、その名をヨブという人がいた。

この人は誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっていた。

2 彼に七人の息子と三人の娘が生まれた。

3 彼は羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭、それに非常に多くのしもべを所有していた。この人は東の人々の中で一番の有力者であった。

ウツはおそらくエドムだと思います。エドムは現ヨルダンの南部からサウジアラビアの北部。なぜ分かるかということ、**哀歌 4章 21節**で、ウツの人々をエドム人と呼んでいるのです。

(**哀歌 4:21 ウツの地に住む娘エドムよ**)

ヨブは神の折り紙付きの人物です。

「この人は誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっていた」と自分で言っていた…のではないんですね。自分で自分のことを「俺は敬虔な人間だ。俺は神を恐れている」と言っているのではなく、客観的事実として、彼は非常に道徳的に問題のない、神を恐れる人だった。どれくらい敬虔なのか。

8 主はサタンに言われた。「おまえは、わたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように、誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっている者は、地上には一人もいない。」

神がご覧になった時、全人類で最も敬虔な男 ヨブ。
彼のような人は地上には一人もいない、と神がサタンに自慢するような人物。最も善い人。
この最も善い人の上に最も不幸な事が、短期間で次々と降りかかったのです。
やがてヨブは「なぜ最も善い人に、最も悪い事が起こるんですか」という問いをしていきます。

そのことを考える前に、どうしても見逃すことが出来ないある存在がいるんですね。それはサタン。
6 ある日、神の子らがやって来て、主の前に立った。サタンもやって来て、彼らの中にいた。

神の子らは御使いたち/天使たち。聖書では、神が直接創造した人格あるものを神の子と言います。御使い/天使には親がいません。神が直接創造したものです。だから神の子。
旧約聖書で神の子という時はいつも、御使い/天使を意味します。
新約聖書に“アダムは神の子だった”と出て来ますが、アダムは神から直接造られたからです。また、クリスチャンのことを“神の子とされる特権をお与えになった”とありますが、クリスチャンは個別に、聖霊によって新しく造られた者だからです。

御使いたちのミーティングの時に、サタンもやって来て、彼らの中にいた。
7 主はサタンに言われた。「おまえはどこから来たのか。」
サタンは主に答えた。「地を歩き巡り、そこを歩き回って来ました。」

地を歩き巡りとは、ちょうど領主が領地を巡回するように、我が物顔でこの地上を歩き回って来た。つまり、地の支配者はサタン。では、何のために地を歩き巡り、歩き回って来たのか。善いことをするためか。いいえ。人を誘惑して墮落させるためです。

ところが、人間を墮落させようと日々働きかけているにもかかわらず、「サタンよ、おまえはヨブを見たか。彼のように潔白で、神を恐れて悪から遠ざかっている者は、地上には一人もいない。」これはサタンに対するチャレンジでした。というのは、サタンは正反対なんです。

8 「おまえは、わたしのしもべヨブに心を留めたか。誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっている者は、地上には一人もいない。」

サタンも元々 神のしもべ/ケルブでした。しかし、誠実で直ぐな心を持たず、神を恐れず悪に邁進していった。それがサタンです。つまり、サタンは今のヨブの生き方のアンチテーゼなんですね。

ところで、サタンは非常に不思議な言語であるヘブライ語ですが、日本語に直訳すると“敵対する者”という意味があるんですね。何に敵対するのか。神と人ともに敵対するんです。

神に向かって人を訴え、人に向かって神を訴える。

神に向かっては文句をつけ、人間を訴えています。「あんなの、救うに値しませんよ。」

人間に対しては神のことを訴えています。「神なんて、信じるに値しないぞ。」

私たちが愛してくださっている、目に見えない大きな神だけが霊的な存在ではなく、サタンという敵対する存在がいるのだ、と聖書は語るのです。

サタンは神に敵対するけど、直に戦うことはできません。なぜなら、サタンと言えども、神から見ると被造物に過ぎない。勝ち目は全くありません。そこで、神が愛している人間を攻撃するのです。特に神を信じていない人には、様々な不公平を見せて「神なんて、信じるに値しない」と思い込ませようとし、福音にベールを掛ける。

既に神を信じている人には、その心をへし折り、不信仰を吹き込み、神に対して苦々しい考えを持つように仕向ける。既に神を信じている人が神に苦い思いを持つようになれば、その人はもはや神を伝えなくなります。伝えたとしても、いびつな神しか伝えられないと思います。

サタンはどのようにして、神と人間の間を引き裂こうとするのでしょうか。

どのようにして信仰者を絶望させ、その信仰を根底から覆そうとするのでしょうか。

サタンが使う武器は昔から同じです。嘘。サタンが最初に人間を攻撃した時に使ったのは嘘でした。

「この善悪の知識の木の実を取って食べたら、賢くなって神のようになる。神は自分以外に神のような存在が現れるのに恐れを感じて、『これ取って食べたらアカン』言うてんねんで。神はあなたがたのことを嫉妬してるんだよ。神はケチなんだよ。」まるで正反対の嘘をつくのです。

今の世界の大混乱の原罪は、この嘘にまんまと引っ掛かった結果だ。これが聖書の説明ですよ。

それと同じように、サタンは苦難の問題について、少なくとも3つの嘘を刷り込もうとしています。

この3つの嘘をそのまま信じ込んでしまうと、どんな人でも信仰が倒れます。

だから、ヨブ記を通して前もってサタンの策略を知り、嘘を見破ることができるように準備しておく必要があるんですね。

ヨブ記の結論部分は明日申し上げるので、今日は残りの時間、サタンが信じ込ませようとしているもの、サタンが用いる苦難の一般的な嘘について考えましょう。

ヨブに3人の友人が近づいて来て論戦を仕掛けました。これにはパターンがあります。

最初にヨブが嘆く。その嘆きに対して1人目の友人が反論する。それにヨブが反論する。

ヨブのその反論に対して2人目の友人が反論する。それにヨブが反論する。

ヨブのその反論に対して3人目の友人が反論する。これで1ラウンド。

これを3ラウンドやるんです。ヨブは1対3ですよ。病気持ってて。

ヨブはその論争の中で繰り返しています。「私の顔を見てくれ。」意味は何ですか。

彼は病気に打たれて顔面が崩れていました。あまりにも醜い姿に変わり果てたヨブを、3人は直視できなかつたでしょう。眼を逸らしながら言葉だけ言っている。

「そうではなくて、俺と真正面から向き合ってくれ。そうして言葉を掛けてくれ。」

ヨブは何度も言ってますが、私もその気持ちが少し分かるような気がします。

この3ラウンドは3章から始まります。1ラウンド目が3章～11章。2ラウンド目が12章～20章。3ラウンド目が21章～31章。29章分が論争なんですね。この論争は1章1章をじっくり読んでいくと本当に深い。ですが時間制限で出来ないの、今日はざっくり、ポイントだけ行きます。

1つ目の嘘

ヨブは嘆きます。その嘆きは何か。彼は一日のうちに、自分の全財産と7人の息子と3人の娘を失くすんです。たった一日で。それでも彼は神を呪うことなく言いました。

1章 21節 「私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」

「サタンよ。おまえは『持ち物を取り上げたらヨブは神を呪う』と言ったが、おまえの予想通りにはならなかった。彼はわたしを崇めているじゃないか。」

それに対してサタンは、「彼の体を打ってください。そしたら彼は、面と向かってあなたを呪うようになる。」しかし、それが身の上に起こった時、ヨブは神を呪いませんでした。

呪ったのは、**3章 1節 そのようなことがあった後、ヨブは口を開いて自分の生まれた日を呪った。**神を呪ったんじゃないです。「生まれて来なければ良かった…」自分の存在を消してしまいたい。

なぜ消してしまいたいと思ったんですか。

3章 23節 「自分の道が隠されている人、神が困いに閉じ込めた人になぜ光が与えられるのか。」

自分の道が隠されている人。これは、私には未来が見えないという意味なんですよ。道が閉ざされているので計画を立てることが出来ない。将来がまったく見えない。

神が困いに閉じ込めた人。神が私を絶望・苦難という困いの中に閉じ込めてしまっている。

今の苦しい状態はこれからもずーっと延々と続く、という考えです。

不幸になった時に一番陥りやすい考え方は、「今の最悪はいつか解決する・いつか終わる」ではなく、「このしんどい事は、出口のないトンネルのように延々と続く。こんななら生まれて来なければ良かった。生まれて来なければ、こんな苦しみを経験しなくて済んだのに…」と嘆くんですね。

その嘆きに対して **4章**

1すると、テマン人エリファズが話し始めた。

テマン人エリファズは聖書の知識をある程度持っている人です。

エリファズはエサウの長男の名前。テマンはエリファズの長男（エサウの孫）の名前。

テマン人エリファズはエサウの孫の名前が付いた町の出身で、エサウの長男の名前をもらったエサウの子孫です。

エサウの父はイサクですね。エサウはイサクから、主なる神についての知識を聞いています。

だから、エリファズも神についての知識を持っているけど完全じゃない。不正確。

実は、聖書の不正確な理解ほど危なっかしいものはないんです。

彼が言おうとしていることは 他の2人が言おうとしていることと基本的に同じで、ひと言で言うと **7 さあ、思い出せ。だれか、潔白なのに滅びた者があるか。どこに、真っ直ぐなのに絶たれた者があるか。**

8 私の見てきたところでは、不法を耕して害悪を蒔くものが、自らそれらを刈り取るのだ。

9 彼らは神の息吹によって滅び、御怒りの息によって消え失せる。

「なぜ不幸があるのか。それは悪や罪を行ったからだ。正しい神は、悪を行っていない人間に不幸が起こることを許されるはずがない。悪や罪は神の前に憎むべきもの。悪や罪を行ったので不幸がやって来るのだ。さあ、思い出せ。だれか、潔白なのに滅びた者があるか。

歴史を見ると、悪人は最後は滅んでいる。神が悪に裁きを下したのだ。

ヨブよ、あなたには今 大変な苦難が降りかかっている。ということは、あなたは罪人なのだ。

あなたがこんなに酷い目に遭っているのは、あなたが人知れず酷い罪を行って来たからだ。

苦難のすべての原因は悪や罪なのだ。」—これは間違いです。

一部は正しいですよ。悪や罪・してはならない事をする事によって身に招く苦難・不幸はあります。不摂生で健康を害する。嘘ばかりついて誰からも信用されなくなる。これらは身から出た錆。自分が悪を蒔いて悪を刈り取ったんです。なので、“この不幸は自分が蒔いた悪の刈り取り” ということはあり得ますが、“すべての苦難は悪の罰” というのは間違いです。ヨブ自身が“それは間違いだ” と完全に反論しています。

21 章

7 なぜ悪しき者が生きながらえて年をとっても、なお力を増し加えるのか。

8 その子孫は彼らとともにあって、彼らの前に堅く立ち、その末裔は彼らの目の前に堅く立つ。

「悪を行ったので苦難が降りかかって来るなら、この世界には誰が見ても絶対悪みたいな奴がおって、最後の最後まで繁栄するというのをどう説明するんだよ！」と言ってるんです。

例えば北朝鮮。3代続いてますよ。金日成（キム・イルソン）—金正日（キム・ジョンイル）—金正恩（キム・ジョンウン）。どれだけおびただしい人たちが殺されてますか。100 万人単位ですよ。

日本人も 800 人以上が拉致されたと言われてるんですよ。だれが彼らに罰を与えましたか。

のうのと生きとるじゃないですか。38 度線の北側、みんなガリガリで餓死している中で、金正恩 ブクブクや。太りまくるとるじゃないですか、アイツ。…また汚い言葉を使ってしまいました…。

「もし物質的繁栄が善の褒美で、様々な不幸が悪に対する裁きなら、誰が見ても悪以外の何者でもない人たちが最後の最後まで物質的に繁栄し、王宮で息を引き取り、その子供も孫も絶対権力者の立場に就けるとするのは理屈に合わないじゃないか」と言っている。これは嘘なんです。

しかし、私たちの心の中にエリファズのような発想が、時としてあるんですね。

自分の近い兄弟姉妹（*クリスチャン）が不幸な目に遭った時は、心から同情できるでしょう。

だけど、日頃から「え！この人 大丈夫？ちょっとダメじゃない？」みたいな歩みの人が、想像を絶するような苦難に遭った時、傍に行って一緒に泣いて寄り添うよりも、「日頃の信仰生活がアカンから、こんな事になんねん」みたいな。そんなとこないですか。ないと言う方は立派な人ですねえ。

また、自分自身に対してもそのような見方をして、「私がちゃんとしてないからこんな事になった。」

「私の日頃の行いが悪いからこんな事になった。」

まるで祝福は自分の行いに基いて獲得できるかのように考え、自分で自分を打ちのめすような人。

私たちの中に、エリファズが染みついているようなところがあるんじゃないか。

この発想は聖書的ではないんです。後に神は「わたしについてデタラメなことを散々並べたことについて、ヨブに執り成しの祈りをしてもらえ」と言っています。
ある種の苦難は罪の結果ですが、全ての苦難が罪の結果というわけではない。
みんなが信じているけど、聖書はそれを支持しません。

2つ目の嘘：神は私のことなんか何とも思っていない。

9章。これはヨブの言葉です。

16 私が呼び、私に答えてくださったとしても、神が私の声に耳を傾けられるとは、信じられない。

17 神は嵐をもって私を傷つけ、理由もなく傷を増し加え、

18 私に息もつかせず、私を苦しみに満たされる。

ヨブは厄介な3人の友人と論争しながら、しばしば彼らに話すのをやめて神に語ります。

「だけど、私のその言葉も神が聞いておられるとは信じられない。」

信じられなくなった信仰者ほど苦しいものはないですよ。なぜ信じられなくなったんですか。

17-18 神は嵐をもって私を傷つけ、理由もなく傷を増し加え、私に息もつかせず、私を苦しみに満たされるから。

嵐をもって私を傷つけ。ヨブの10人の子供たちは、嵐で屋根が崩れて、その下敷きになって全滅したんです。「あの嵐のせいで、私は後継者を全員亡くした。愛していた者が全員いなくなった。」残ったのは災難を伝えた4人のしもべだけ。

「あなたは嵐で私を傷つけた。理由もなく傷を増し加え、私に息もつかせなかった。そのように私を弄ぶ神が、親身になって私のこの叫びを聞いてくださっているとは信じられない。」

そして、**9章**で初めて、彼は人として口にしてはならない言葉を使うんです。

22 みな同じことだ。だから私は言う。神は誠実な者も悪い者も、ともに絶ち滅ぼされると。

誠実に生きても悪行の限りを尽くしても、神にとってはどっちも一緒。投げやりになっています。

23 突然、にわか水が出て人を死なせると、神は潔白な者の受ける試練を嘲られる。

潔白な人が不幸になって苦しんでいる時に神は笑っている。

これ、考えられますか。めちゃくちゃな解釈です。

実は、サタンがヨブにどうしても言わせたい言葉があるんです。それは、面と向かって神を呪うこと。

ヨブが重い皮膚病になり、灰捨て場（当時の市街地にあるゴミ捨て場）に座って、土器のかけらで体を掻きながら呻いていた時、彼の心を一番慰め、支えてくれるはずの妻から、「こんなになっても神を崇めるのですか。神を呪って死になさい」と言われるんです。妻から。

「神を呪って死になさい」というのは、サタンがヨブに言わせたいことなんです。

サタンはヨブの最も近い人を使って そそのかしています。「さあ呪え！ さあ神を呪え！」

神を呪わせるためにどうすればいいか。歪んだ神概念を与えることです。

正しい本当の神概念ではなく、神に関するフェイクニュースをヨブに信じ込ませる。サタンによって。

「神は人間のことなんて、これっぽっちも思っていないからな！」「正しく生きようが悪く生きようが、神にはどっちでもいいことだ。いやあ、神は潔白な者が苦しんでいる時、天で笑ってるんだぞ！」

全く事実ではない嘘を吹き込んでるんですね。

ヨブはとうとうそれを、人として口にしてはならないことを、ここで言ったんです。

しかし、ヨブがこのように考えるのは、ある意味無理のないことかもしれません。

ヨブは族長時代／アブラハム・イサク・ヤコブの時代の人です。

なぜ族長時代の人だと分かるのか。彼は息子たちのために いけにえを献げてるでしょ。

族長時代は族長が祭司の務めを果たしたんです。アブラハムもイサクもヤコブもやりました。

族長時代は、旧約聖書がまだほとんど存在していない時代です。

創世記は全部で 11 の歴史書が合本化されて創世記です。もしかしたら、その冒頭の部分は見たかもしれません。でも、極々初期の一部しか見たことがないでしょう。彼らはほとんど聖書を持ってない。

神様に関する最も正確な知識はすべて聖書の中にあります。その聖書を持ってなかった。

私たちと違って、神についての知識はほんのわずかしかなかったんです。

私たちは旧約聖書だけでなく新約聖書まで持っています。

新約聖書に書かれている、神のひとり子イエス・キリストについて知っていますよね。

「善い人に悪い事が起こるのは、神が善い人を愛していないからだ。悪い事が起こるのは、神がその人を愛していないからだ」と絶対に言うことができないという完全な反証がイエス・キリストです。

キリストは一度も罪を犯したことがなく、その口に何の偽りもなく、生まれてから召されるまで神の御心から逸れたことは 1 回もなく、善いことしかなさなかった。

泣く人と共に泣き、喜ぶ人と共に喜び、死を目の前にしている人には勇気を与え、罪におののいている人には赦しを与えて、生きる勇気を授けて来た方。

その方の最期はどうなりましたか。

弟子に裏切られ、でっち上げ裁判で木に吊るされました（ユダヤ人には一番屈辱的な死刑の方法）。鞭打たれ、唾掛けられ、殴られ、真っ裸にされて十字架につけられ、最期は神から捨てられて、私たちの身代わりとなってくださったのです。

なぜ神は、イエス・キリストにそのようなことをされたのでしょうか。

神がイエス・キリストを憎んでいたからですか。逆です。「この子なら、たとえ十字架に掛けて身代わりに捨てたとしても、わたしへの苦い思いをひとかけらも持つことはない」という、イエスへの信頼がありました。

愛していて、信頼していて、これぞと見込んでいるので、神はイエスを試練に遭わせられたんです。クリスチャンとはキリストに従って行く人です。キリストに従って行く人の身の上に、キリストに降りかかったことと似たようなことが起こるのは十分あり得るのです。

神は私たちが愛しています。自分が経験している出来事を通して、神の愛を推察してはならないんですね。そうではなく、イエス・キリストという絶対的な歴史的事実を通して「神の愛は揺らぐことがない。神は私を愛してくださっている。試練のただ中にある時、神も一緒に泣いている。」

「神は私を愛している」。もしこれを手放したら、もしこのことを疑ったら、どんな信仰者でも立つてられません。人格あるものにとって、最も無礼なことって何でしょう。疑うことです。

神はこれ以上ない愛で、あなたを愛してくださっている。

それをあなたが見ている範囲の出来事で、「いや、愛されていない」と結論付けてはならないんです。

3つ目の嘘：人生はこの世がすべてである。

14章

7木には望みがある。たとえ切られても、また芽を出し、その若枝は絶えることがない。

木は切り倒されても、切り株からまた芽が出て来る。例えばオリーブ。

10しかし、人は死ぬと倒れたきりだ。人間は息絶えると、どこにいるのか。

11水は海から消え去り、川は干上がり、涸れる。

12 そのように、人は伏して起き上がらず、天がなくなるまで目覚めず、その眠りから覚めることはない。

木は切り倒してもまた新芽が出て来る。しかし、人は死ぬと倒れたきりだ。人間は息絶えると、どこにいるのか。これを説明するのに、ヨブは海と川をたとえに使います。

海の水も川の水も蒸発して見えなくなる。どこに行ったのか分からない。

それと同じように、人間は死んだら消滅するという死生観。

これは聖書が語っている死生観ではありません。

しかし、旧約聖書全体を見ると、死後の世界や永遠の命についての情報が非常に少ないんですね。特にヨブの時代は旧約の初期の時代なので、神を信じている人でも死後の世界については曖昧です。彼は「人間が死んだら、水が蒸発するように消えてなくなってしまう」と語っていますが、後にこの考えを変えます。しかし、この時点ではそう思っている。

つまり、人生は今生きている時代がすべて。だから、ここで不公平であることは許せない。

21 自分の子どもたちが人に尊ばれても、彼がそれを知ることはなく、彼らが人に卑しめられても、彼には見分けが付きません。

22 ただ彼の肉が彼のために痛みを覚え、そのたましいが彼のために嘆くだけです。

死んでしまったら、自分の子供たちが世間から尊敬されたとしても、それを見ることができない。

家族が困った時に相談に乗ってあげることもできないし、庇ってあげることもできない。

私の肉体はウジに食われて朽ちていくだけで、最終的には消滅する。

人生って何なん！何と虚しい！結局消えて無くなる、束の間の夢幻のようなものなのか。

豊臣秀吉のようなことを言っている。浪速（なにわ）の栄えも夢なんです。

これは間違いですよ。聖書が語っていることではないんです。この世界だけがすべてなら、不公平は非常に大きくクローズアップされますが、続きがあったらどうですか。

韓国では生まれた瞬間に1歳です。日本では0歳ですよ。1年経ったら韓国では2歳。日本では1歳。

なぜ生まれた時に1歳なのか。お母さんの子宮の中で既に人生が始まっているから。

人生を3つのステージで考えているのです。

第1のステージ：胎児時代。十月十日（とつき とおか）と言いますね。正確じゃないけど。

胎児時代もお母さんの声を聞いています。お母さんの影響を受けます。例えば、妊娠中に煙草を吸ったり、アルコールを飲んだりすると、へその緒を伝って有害物質が赤ちゃんに行く。やがて、胎児時代が終わり/終末を迎えます。何ですか。へその緒を切られるんです。誕生して胎児時代は終わりますが、この終わりは同時に第2ステージ：誕生。

第2ステージ：誕生。地上の人生の始まり。60年・70年・80年、100歳まで生きる方もおられるでしょう。いつか亡くなります。が、この終末で終わりではなく、地上生涯の終末の後で永遠の国での誕生が始まるんです。クリスチャンは第3ステージ：天国に行きます。

第3ステージ：天国。天国は終末がありません。

第1の人生は第2の人生のための準備であったように、第2の人生は第3の永遠を過ごす人生のための準備なんです。最大の準備、まずすべきことはイエス・キリストを受け入れて救われることです。

そして、永遠の天国で初めてねぎらいがあるんですね。地上で不当な扱いを受けたこと・不可解な苦難に遭ったこと・酷い目に遭ったこと・良いことをしたのに誤解され、逆におとしめられてしまったこと。それらはこの第3の人生において清算されます。“第2ステージで人生終わり”と思うから不公平だと思えるのですが、本当の評価は次なんです。3番目が一番大事。終わらないから。永久に続くから。

最後にC・Sルイス(1898-1963)の話をして終わしましょう。

「キリストを信じているのに変な事が起こる。酷い目に遭った。損をした。正直に生きることで、却って遅れを取るようになった。神を恐れなくて適当に悪いことをしている方が、世の中すいすい泳ぐように生きることができる。クリスチャンになって正しく生きようと思ったら、ずいぶん不利になったり損になったりすることがある。こんな辛い事も、あんな辛い事もあった。」

C・Sルイスは、若いクリスチャンたちがそう呟いているのを聞いて言いました。

「刑務所に親切な人や優しい人がいたとしても、基本 刑務所だから矯正プログラムが色々ある。早起きしなあかん。就寝時間決まってる。自由束縛。辛いなあ。嫌やなあ。でも、刑務所やからしやあない。キミ、この世界を『ここ刑務所や』と思ってるか？ もしかしてホテルと思ってない？」

信仰者がこの世界はホテルだと思ったら、「サービス悪いな！ 挨拶せえへん！ なんや、このベッドメイキングは。俺お客やぞ！ 『お客さんは神さま』って三波春夫も言うてるわ！」いや、この世界は刑務所。天国がホテルなんです。

「地上では様々な制約や訓練・プログラム・辛い事があるが、それは、ここが永久のホテル(天国)ではなくてトレーニングセンターだから。本当の安息、本当の素晴らしい場所である 次の世界に行くまでの訓練期間なのだ」と語っていました。

さて、なぜなのか。どのように歩んだらいいのか。まだ前段しか行ってません。結論は明日お話ししたいと思います。皆様の上に神様の祝福があることを願っております。